第38回

読書感想文コンクール

絵／そら

作品集　２０２４

利尻富士町立鬼脇公民館

第三十八回 読書感想文コンクール作品集の発刊にあたって

利尻富士町教育委員会
教育長　吉田　秀昭

この「読書感想文コンクール作品集」は、今年で三十八回目の発刊となりました。本年度のコンクールには、小学生三十二編、中学生四十八編、合計八十編の応募をいただき、その中から優秀作などに輝いた作品二十一編を一冊にまとめました。

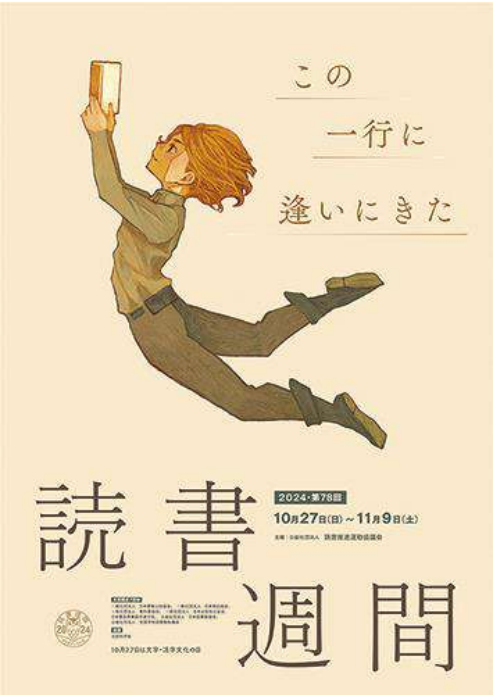
令和五年度の「国語に関する世論調査」において、一か月に読む本の冊数（電子書籍含む）について、「読まない」との回答が六十二パーセントと、初めて半数を上回り、読書離れが加速していることが明らかとなりました。同じ調査で、電子書籍を普段から利用する人の割合は四割を超え、読書量が減っている理由については、四割が「情報機器で時間が取られる」と回答しています。

また、「読書感想文は一番大変な宿題だからなくなればいい」「強制されて苦痛しか残らない宿題で、本嫌いを増やすだけ」などの意見があることも事実でしょう。読書感想文という宿題は、無意義なものなのでしょうか。

ここまで、ネガティブな話ばかり続けていきましたが、私たちはこの事業が、児童・生徒だけでなく、保護者や教職員にとっても有意義なもので、より価値のある事業にしたいという信念で取り組んでおります。昨年もここで述べましたが、相手が伝えたいことを読み取り、整理し、自分の言葉で伝える力は、本町の課題となっております。もちろんこの力は、読書感想文を書けば直ぐに身に付くものではありませんが、これをきっかけに「苦手なことに取り組みやり遂げた体験」「内容を理解しようとする体験」「理解した内容を、言葉にする体験」「自分の意見や感想を、言葉にする体験」のひとつひとつが、大切な経験となるでしょう。

今後もコンクールを通じてより多くの子どもたちが読書の楽しさやすばらしさを体験することができるよう、事業内容の充実を図るとともに、この作品集が、より多くのみなさまに読んでいただけることを願っています。

おわりに、時節柄ご多忙のなか本事業の周知から審査、表彰に至るまでにご尽力いただいた関係各位に心から感謝申し上げますとともに、今後とも多くの子どもたちの個性、可能性を引き出すため、読書活動の推進にご尽力いただきますようお願い申し上げ、発刊のことばといたします。



【作品集　目次】

小学校一学年の部

☆　優秀作

『スイミー　小さなかしこいさかなのはなし』をよんで

鴛泊小学校　一年　矢田（やだ）　真尋（まひろ）・・・　4

小学校二学年の部

☆　優秀作

『たべてあげる』

利尻小学校　二年　土上（つちがみ）　ひかり・・・　4

小学校三学年の部

☆　優秀作

『からっぽになったキャンディのはこのおはなし』を読んで

鴛泊小学校　三年　川村（かわむら）　桃々葉（ももは）・・・　5

★　佳　作

ドッカーンノラネコぐんだん

利尻小学校　三年　飯田（いいだ）　惟華（しいか）・・・　5

★　奨励賞

『あの世レストラン』を読んで

鴛泊小学校　三年　大関（おおぜき）　夕楓（ゆうか）・・・　6

小学校四学年の部

☆　優秀作

ボロボロ自転車とぼく

利尻小学校　四年　土上（つちがみ）　凌央（りょう）・・・　7

小学校五学年の部

☆　優秀作

『セイギのミカタ』を読んで

利尻小学校　五年　牧野（まきの）　泰希（たいき）・・・　8

★　佳　作

『みんなが月にいく前に』を読んで

鴛泊小学校　五年　川村（かわむら）　柚珠月（ゆずき）・・・　9

★　佳　作

いつか行ってみたいアラスカ

鴛泊小学校　五年　中山（なかやま）　照久（てるひさ）・・・　10

小学校六学年の部

☆ 優秀作

『インサイドヘッド2』を読んで
駕泊小学校　六年　須田（すだ）　ひまり・・・　11

★ 佳　作

『給食が教えてくれたこと』を読んで
駕泊小学校　六年　岩木（いわき）　莉那（りな）・・・　12

★ 奨励賞

『キツネ山の夏休み』を読んで
利尻小学校　六年　山谷（やまや）　詩葉（ことは）・・・　12

中学校の部

☆ 優秀作

なぜ考えは人によって違うのか
鬼脇中学校　三年　佐々木（ささき）　日馬（はるま）・・・　14
自分の過去と向き合う
鬼脇中学校　三年　井田（いだ）　心優（みゆ）・・・　15

★ 佳　作

『ぼくらの七日間戦争』を読んで
鬼脇中学校　一年　飯田（いいだ）　乃唯（のい）・・・　16
「あの日々」
駕泊中学校　二年　川村（かわむら）　栞（しおり）・・・　17
「生きる」ということ
駕泊中学校　三年　黒川（くろかわ）　結凪（ゆうな）・・・　19
「現代の私と向き合って」
駕泊中学校　三年　長森（ながもり）　未羽（みう）・・・　20
人生の中で大切な事
駕泊中学校　三年　長森（ながもり）　ルナ・・・　21
『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』を読んで
駕泊中学校　三年　福士（ふくし）　恭平（きょうへい）・・・　23

★ 奨励賞

『桃太郎』を読んで
駕泊中学校　一年　近江（おうみ）　美和翔（みなと）・・・　24

小学校一学年の部

☆ 優秀作

『スイミー　小さなかしこいさかなのはなし』を読んで

鴛泊小学校　一年　矢田　真尋

ぼくは、この本のだいめいに、かしこいってかいていたから、どんなかしこいさかなかきになって、この本をよんでみました。

このおはなしはスイミーが、ひろいうみのどこかで、なかまをたすけるおはなしです。

本の中で、おもしろかったところは、なかまの小さいさかなたちが、大きいさかなにかたちをかえておよいだところです。

ぼくだったら、スイミーみたいに、下のほうをおよいで、大きいさかなからみをまもります。

スイミーは、なかまをまもるために、みんなで大きいさかなのかたちでおよぐとこをかんがえて、かしこいとおもいました。

＊こうひょう＊

あらすじや感想がしっかり書けています。本を選んだ理由「どんなかしこいさかなかきになって」という部分に対する自分なりの答えを見つけ、しっかり自分の言葉で書けているのも良いと思いました。

小学校二学年の部

☆ 優秀作

『たべてあげる』

利尻小学校　二年　土上　ひかり

この本は、たべものをすききらいするお話しです。

しゅじんこうは、りょうたくんで、やさいがきらいな男の子です。

ある日、りょうたくんの前に小さなりょうたくんが出てきて、きらいなやさいをたべてくれました。その日からきらいなやさいは、小さなりょうたくんがぜんぶたべてくれるようになりました。わたしはちゃんとたべた方がいいなと思いました。

そして小さかったりょうたくんは、いつのまにかりょうたくんより大きくなっていました。やっといけないことだと気がついたりょうたくんだけど、大きくなったりょうたくんにたべられてしまいます。りょうたくんははんせいして、「もうすききらいしないよー！」とさけびました。

わたしもきらいなものがありますが、一口でもたべるようにします。小さな自分が出てこないように。

＊こうひょう＊

物語を楽しみ、内容をしっかり理解しています。その上で、「自分もこうしていこうと思う」といった感想が書けています。「小さな自分が出てこないように」というおわりの文章が、物語とリンクしているのも良いですね。

小学校三学年の部

☆　優秀作

『からっぽになったキャンディのはこのおはなし』を読んで

鴛泊小学校　三年　川村（かわむら）　桃々葉（ももは）

わたしがこの本をえらんだきっかけは、キャンディのはこがからっぽになった後、どうなったのか知りたくなったからです。この本に出てくるキャンディのはことは、そらくんという男の子がお父さんからたん生日にもらった、大事なはこのことといいます。

この本は、はこが主役です。

そらくんが持っていたはこのキャンディが、そらくんがたべていくうちにどんどんなくなって、はこが一人ぼっちになることを不安に思っていたときに、そらくんがたから物を入れていき、さいごにはたからばこになるおはなしです。

わたしが一番心にのこったところは、あめが一つも入っていないとき、そらくんが来て、「ぼくのたからばこ」と言ったところです。なぜかというと、からっぽになったはこがそらくんのたからばこになって「よかったな。」と思ったからです。

わたしも、友だちからもらった手紙やたから物を入れているはこを大切にしていきたいです。

＊講評＊
全体としてまとまった感想文が書けています。この物語のなかでキーアイテムである「はこ」について「この本は、はこが主役です。」と注目している視点が鋭いですね。

★　佳　作

ドッカーンノラネコぐんだん

利尻小学校　三年　飯田（いいだ）　惟華（いいか）

わたしは、ノラネコぐんだんのシリーズが大好きです。なので、夏休みに『ノラネコぐんだんパンこうじょう』の本を読みました。

このお話しに出てくる登場人物は、ノラネコぐんだんとワンワンちゃんです。

主人公のノラネコぐんだんは、わくわくすることが大好きで、よく失敗し、ばくはつさせてしまいます。だけど、どんなことにもちょうせんするところがすごいなぁと思います。ここのお話しはノラネコぐんだんが、かってにパンを作ってしまいます。パンが大きすぎて、工場をばくはつさせてしまったので、パン屋さんにきづかれてしまいます。パン屋さんにゆるしてもらうために、パンを売ったり、工場をなおしたりするところが面白いです。

パンをかってに作ってしまうところは、よくないけれど、わたしは見ただけでは作れないのですごいと思いました。

そして、パン屋さんも「よろしい。それじゃあ、これから仕事をしてもらいます」と言い、工場はこわされたのをゆるしてあげるのが、やさしいと思いました。

＊講評＊
大好きなシリーズ作品での読書感想文。ノラネコぐんだんとワンワンちゃんの性格についてふれている部分がいくつかあり、キャラクターを通して物語を楽しんでいるのだと感じられました。

★ 奨励賞

『あの世レストラン』を読んで

鴛泊小学校　三年　大関（おおぜき）　夕楓（ゆうか）

私がこの本をえらんだりゆうは、〇〇レストランのシリーズがすきで読みたかったからです。

この本は「私」があの世に行って、レストランを作るお話です。さいしょ、どんな物語なのかなと思いました。

ぎもんに思ったのは、なぜ「私」があの世にいるのだろう？と思いました。あと、自分が「私、死んだの？」と言っていたのがこわいなと思いました。

さいごに、「どうぞ、ごゆっくり。」といっていたので、「私」がレストランにいるのかなと思いました。

もし自分だったら、レストランに行っても、ぜったいに帰ります。なぜなら、あの世のレストランはぜったいこわそうだからです。

死ぬのがこわいです。

＊講評＊
本と読書感想文を通して、「死」のこわさを自分の言葉で書けているように思います。楽しいや面白いだけでなく、あまり感じたくない気持ちを読書で知っておくこともとても大切なことです。

小学校四学年の部

☆　優秀作

ボロボロ自転車とぼく

利尻小学校　四年　土上（つちがみ）　凌央（りょう）

ぼくが、この本を選んだ理由は、お母さんにすすめられたからです。主人公のすごいところは、人からもらった物が、どんなにボロボロでも、大切にしていることろです。

このお話の登場人物は、主人公のぼく、お母さん、しげおばちゃん、たくさんの友達です。どんなお話かと言うと、主人公の自転車がこわれたけど、しげおばちゃんからもらった自転車で、小さなぼうけんするお話です。

ぼくが、このお話のすてきだなと思った場面は、しげおばちゃんからもらったボロボロのきずだらけの自転車を、自分の手で一生けん命ふき取って、すぐに使えるようにしたところです。理由は、人からもらったものをきちんと大切にしているところです。ぼくだったら、もらった自転車がボロボロだったら使わないで、捨てると思います。

ぼくがこのお話のすてきなセリフは、「あわわ」というセリフです。理由は、次のページにさまざまなハプニングが起こって面白かったからです。

主人公は、自転車が真っ直ぐ進まないことに気が付きました。自転車のハンドルをどういう風に曲げれば真っ直ぐ進むか、クセを考えるところが、ぼくとはちがいました。ぼくだったら、あきらめて乗らないと思います。

この本を読んで、物を大切にすることは当たり前だけど、難しいことなので、それを出来る主人公はすごいなと思いました。みなさんもぜひ、読んでみて下さい。

＊講評＊

物語の感想のなかで、主人公と自分自身を比較して書けているのが良いと思いました。自分とはちがう考え方や行動について注目し、主人公の行動が当たり前だけど難しい「すごい」ことだと気づけています。

小学校五学年の部

☆ 優秀作

『セイギのミカタ』を読んで

利尻小学校　五年　牧野（まきの）　泰希（たいき）

「セイギのミカタ」ってなんだかかっこいい。僕はこのタイトルに惹かれ、どんなお話なのか気になり、この本を選びました。

主人公の木下守（キノ）は恥ずかしいと顔が真っ赤になる赤面症で、クラスの人気者の大我にからかわれてしまいます。いつも正義感の強い周一が止めに現れますが、余計に注目を浴びてしまいそれもまた悩みとなっていきます。そんなキノが家族や友達の勇気ある行動によって成長していくお話です。

僕はこの本を読んで印象に残ったことが二つあります。一つ目は周一の「みんながちょっと人をからかったり、いじめたりすることに鈍感になって、どんどんエスカレートしていくの、すごくいやなんだ」という言葉です。本人が気付かないうちに”いじる“が”いじめ“になってしまうことがあると思います。キノにとって注目を浴びてしまうことで少し嫌だなと思っている周一の勇気ある行動はなかなかできないことだと思います。僕も自分がいじられたり他の人がやられている場面を見ると嫌になることがありますが、なかなか勇気を出して言うことはできないと思います。周一の勇気ある行動はまさに正義の味方だなと思いました。

二つ目は自分の気持ちを大我に伝えたキノの勇気ある行動です。周一やひとみちゃんと関わっていくことで、色々葛藤しつつも自分にとって大切なことは何かを考え少しの勇気を持って、行動することができたキノを僕は尊敬します。

あとがきを読むと作者も赤面症だったことが書かれていました。キノも作者も自分の苦手なことを克服し前向きに考えられるようになったことがすごいなと思います。周りに流されず、自分や周りの気持ちを大切に自分で考えて行動することの大切さを教えてもらいました。

この本を読んで僕は、自ら行動することで何かを変えていくことができる。困っている人がいたら助けてあげられる「セイギのミカタ」になれるようまわりをよく見て友達や家族、これから出会う色々な人たちと楽しく過ごしていきたいと思います。

＊講　評＊

全体としてまとまっていて読みやすく、「この本を読んでみたい」と感じる内容でした。印象的な部分を取り上げ、自分自身だったらどうかについて書けているのも良いですね。あとがきまで読んでいて、物語が書かれた背景を感じ取れているのも素晴らしいと思いました。

なぞなぞクイズ

魚がまったく
つれなくても
みんなが楽しそう
にしているツリ
ってなーんだ？

なぞなぞクイズ

頭が赤くなると
とけてなくな
ってしまうも
のってなーんだ？

答えは17ページへ

★ 佳 作

『みんなが月にいく前に』を読んで

鴛泊小学校　五年　川村（かわむら）　柚珠月（ゆずき）

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、本のタイトルの「みんなが月にいく前に」とはどういう意味か気になったからです。

この本を書いた人は吉田道子さんという人で、日本の児童文学作家でいろいろな本を出している有名な作家です。

この本は、体育と詩の時間が大好きな小学五年生の大機という男の子が主人公の物語です。

ある日、大機と同級生で仲良しだった周平という男の子が飛行機事故で亡くなってしまいます。そのまま二学期が始まり、席替えでは最近転校してきて一度も話したことのない及川くんが隣の席になります。及川くんは周平と性格は似ているのに見た目が太っていたので、大機は最初避けていました。周りの人に及川くんという新しい友達ができたと思われるのも嫌だったし、周平を忘れてはいけないと思ったので、及川くんに冷たい態度をとってしまいます。でも一緒に体育の鉄棒や跳び箱の練習をしたり、及川くんの方から遊びに誘ってくれたりするうちに及川くんのことを友達として好きになっていきます。

親友を亡くした悲しみと新しい友人と仲良くなることへの葛藤が描かれていました。

私が一番心に残った場面は、大機が周平を忘れるのを怖がっているときにお父さんが小さい頃飼っていてかわいがっていたロッフという犬の話を大機にしてくれたところです。お父さんが話した「ロッフは心のなかで生きている」という言葉が刺さりました。なぜなら、私も少し前に大好きだったロックという犬を亡くしたからです。ロッフとロックという名前が似ていたのもびっくりしました。

本を読んで思ったことは、大機は私と同じ小学五年生で私がもし仲良しだった友達が亡くなったら、きっと立ち直れないと思うので、大機もすごく辛かったはずなのに立ち直ったのがすごいなと思いました。だから、今いる友達を大切に仲良くして協力することが大事だと改めて思いました。

最後に、私が気になっていた「みんなが月にいく前に」という題名は詩の授業で及川くんが作った詩のタイトルから来ていました。

「みんなが月に行く前に
僕にはしたいことがある
みんなが月に行く前に
僕には言いたいことがある
みんなが月に行く前に」

きっと後悔しないように、今やりたいことを出来るうちにやろうというメッセージが込められているのだと考えました。

なぜなら命はずっとあるものではないからです。

＊講　評＊

こちらの感想文で一番グッときたのは、「親友を亡くした悲しみと新しい友人と仲良くなることへの葛藤が描かれていました」という一文です。物語をしっかりと捉え、わかりやすくまとめています。選書理由とその答えをしっかり見つけ、書けているのも良いと思いました。

★佳作

いつか行ってみたいアラスカ

鴛泊小学校　五年　中山（なかやま）　照久（てるひさ）

僕は「旅をする木」という本を読みました。なぜこの本を読んだかというと、テレビでアメリカ合衆国のアラスカについての紹介を見て、こんな自然に囲まれた土地が世界にあるのかと思い、まだまだアラスカのことが知りたいと思ったからです。

この本は写真家の星野道夫さんがアラスカの大自然とそこに暮らす人々や生き物たちに魅了されて、アラスカに移住し、いろいろな旅をしてきたことを書いた本です。

この本の中では、たくさんのきれいな景色や動物たちが出てきます。その中でも、ぼくがいちばん心に残ったことは、道夫さんが、人には教えたくない秘密の場所といった赤い絶壁の入江です。なぜかというと、その美しい景色を想像して読むと、実際には見えはしないけれど、包みこまれるような静けさの中、入江のどこかでハクトウワシが鳴いていて、密集した下草の中には赤いサーモンベリーの実がなっていて、まるで道夫さんと一緒にボートに乗って赤い絶壁の入江を探検しているような気持ちになれたからです。ぼくの普段の生活とはかけ離れているけれど、もしかしたら、ぼくが学校で机に座っている間でも、アラスカのどこかでザトウクジラの親子が泳いでいたりするのかなと思うと、とても不思議で世界が広いことにわくわくします。また、僕はカリブーのスープという話で、改めていつも誰かの命を犠牲に生きていることを知りました。私達が生きてゆくということは、「誰を犠牲にして生き延びるのかという、終わりのない日々の選択である」という言葉にはっとしました。ぼく達はスーパーで何気なくお魚やお肉を買っているけれど、本当は自分たちで、豚や牛などを狩らないと生き延びていけないはずです。忘れてしまいがちだけど、いつも命に感謝していただきたいなと思います。

僕は、この本を読んでアラスカについて少し詳しくなりました。そして、今まで世界といえば有名な観光地ばかりに目がいっていましたが、アラスカのような土地もあるんだな、と視野が広がって、世界の見え方が変わりました。僕の住んでいる利尻も大自然に囲まれています。どんなことでもいいから自分のできることから一歩踏み出して冒険してみようかな、と思えるようになりました。そして、大人になったらアラスカに行って、旅をする木にでてきた場所にも行ってみたいです。

＊講　評＊

普段の生活とかけ離れたアラスカの景色を客観的に比較し、世界の広さを実感した喜びが表現されていて素敵でした。世界の見え方が少し変わるだけで、わくわくすることはあちこちにあることに気付きますね。

小学校六学年の部

☆　優秀作

『インサイドヘッド2』を読んで

鴛泊小学校　六年　須田（すだ）　ひまり

私がこの本を選んだ理由は、「インサイドヘッド」というお話をテレビで見て、2も見たいなと思っている時に、本屋さんで見つけたからです。

このお話は、十三歳になった主人公のライリーを、小さな頃から頭の中の司令部で見守ってきた感情たち、ヨロコビ・カナシミ・イカリ・ムカムカ・ビビリのもとに、ある日、シンパイ・イイナー・ハズカシ・ダリィという大人の感情がやってきて、ヨロコビたちを追い出してしまいます。ヨロコビたちが司令部に戻ろうと向かう中、シンパイはいろいろな問題を引き起こしてしまい、ライリーが複雑な感情や出来事を抱えながら、成長していくというお話です。

私は、二つ心に残った場面があります。一つ目は、ライリーが親友二人と大好きなアイスホッケーのキャンプに行ったとき、二人と同じ高校にいけないことがわかり、車を降りて一人になったときにわんわん泣き出したライリーに、ヨロコビがかけた言葉です。

「うん、いいの、これも必要」

私はこの台詞を読んで、辛かったり、寂しかったりしたら、我慢しなくていいんだ。泣くことも大切なんだということがわかりました。

二つ目は、ヨロコビが自分らしさの花を引っこ抜いて、新しい自分らしさの花が咲いた場面です。私は、この場面の文章がすごく印象的でした。

「前向きな思い出も、つらかった思い出も、いっしょに光ってる。いままでとはちがって、花はどんどん形と色をかえていく。花はつぎつぎと色をかえつづけ、ますますきらめく。いいところもダメなところもみ～んなライリーなんだ。」

というところです。結局はいいところもわるいところも全部自分らしさで、いいところもわるいところもあっていい。なくちゃダメなんだ。そしていろいろな感情が混ざり合いながら、成長していくんだということがわかりました。

私はこの本を読んで、泣くことや自分のダメなところに対する見方が変わりました。今までの私は、泣くことは嫌だし、恥ずかしいこと。自分のダメなところは自分らしさでもなんでもなく、早くなおしたいところ、自分の嫌なところだと思っていました。でも、インサイドヘッド2を読んで、確かに泣くのは嫌かもしれないし、自分のダメなところを早くなおしたいかもしれないけれど、それでこそ私だし、それがないと私じゃない。と思うようになりました。私も十二歳でライリーと歳が近いから、大人の感情が増えてきて失敗することもあるかもしれないけど、これからは、無理をしないで、自分らしく過ごしていこうと思いました。

＊講　評＊

選書理由、あらすじ、印象的な場面、感想がわかりやすくまとまっています。印象的な場面と感想がしっかり対応していて、本を通して「泣くことや自分のダメなところに対する」考え方が変わったと感じていますね。マイナスな部分はどうしても直したいと思ってしまいますが、それも含めての自分なのだと思えると少し生きやすくなるかもしれませんね。

★ 佳　作

『給食が教えてくれたこと』を読んで

鴛泊小学校　六年　岩木（いわき）　莉那（りな）

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、題名を見たときに、「給食が何を教えてくれるのだろう?」と気になったからです。

この本は学校栄養士の松丸奨さんが「最高の献立」を作るために、努力したことや、挑戦したことが書かれています。内容は主に、

「最高においしいを目指して」
「好ききらい少年、栄養士になる」
「目指せ!給食日本一」
「給食の向こうに見えた世界」

の四つに分かれています。

その中で私がいちばん心に残っているのが「給食の向こうに見えた世界」です。これは松丸奨さんが世界の食生活を知るために、スモーキーマウンテンという有名な貧困地域に行ったときの話でした。スモーキーマウンテンに住んでいる人たちは、大量のゴミのなかから生ゴミをさがしだし、あげ直して食べているらしいです。私はこのことを知ったときにとても驚きました。いつもは給食を普通に残しているけれど、スモーキーマウンテンの人のように、食べたくても食べられない人たちのことを知って、食べられることに感謝して、給食で苦手なものが出たときも少しは食べるように頑張ってみようと思いました。

私はこの本を読んで、日本では食べ物が充実していて恵まれているけれど、他の国や地域では安全で美味しい食べ物を食べられない人たちがいることを知りました。給食は苦手なものがたくさんでてくるから、いきなり全部食べようとするのは大変だけど、食べる喜びを感じながら、苦手なものでも、おいしく食べられるように頑張りたいと思います。

＊講　評＊

簡潔にまとまった感想文です。印象的だったエピソードを通して、食の問題について考えを広げることができています。そして自分ができることをやっていこうと目標を立てられているのも良いと思いました。安全に食べられる、ということに感謝ですね。

★ 奨励賞

『キツネ山の夏休み』を読んで

利尻小学校　六年　山谷（やまや）　詩葉（ことは）

皆さんは夏休みどんなことをして過ごしますか?私はゲームをしたり、勉強をしたり、旅行へ行ったりしました。でも、私はこの『キツネ山の夏休み』を読んで、こんな夏休みもいいなぁと思いました。

私がこの本を選んだ理由は、キツネ山ではどんな夏休みを過ごせるのか気になったからです。

この本は、都会の小学生・弥が、一人で「水と伝説の町・稲荷山」のおばあちゃんの家に行き、伝説のキツネや猫又、妖怪と不思議な出会いをするお話です。

心に残ったことは、二つあります。

一つ目は、弥がいろんな人に会うのですがそれが妖怪や化け物が多いということです。弥が初めてあった重要な人は二人います。

一人目はオキ丸です。弥と同じぐらいの年のような男の子です。その子は稲荷山行きの電車で出会った子で、稲荷山を守っているという伝説のキツネ百八匹の中の一匹でキツネに変身して、弥と空を飛んだり一緒に遊んだりしました。

二人目はおじさんです。行きの駅でおばあちゃん家まで一緒に歩いて送ってくれたおじさんは、おばあちゃん家で餌をあげている猫(猫又)の大五郎なんです。猫又は人間の言葉を喋ったり、人に化けたりします。二人(二匹?)はたくさん活躍しているので注目してほしいです。

二つ目は、事件や願い事を解決するところです。街の人は、伝説のキツネをこの山の守り神だと思い、毎日大勢の人が願い事をして、キツネは全てではないけれど願いを叶えてあげているそうです。それをオキ丸と弥がするところが面白かったです。

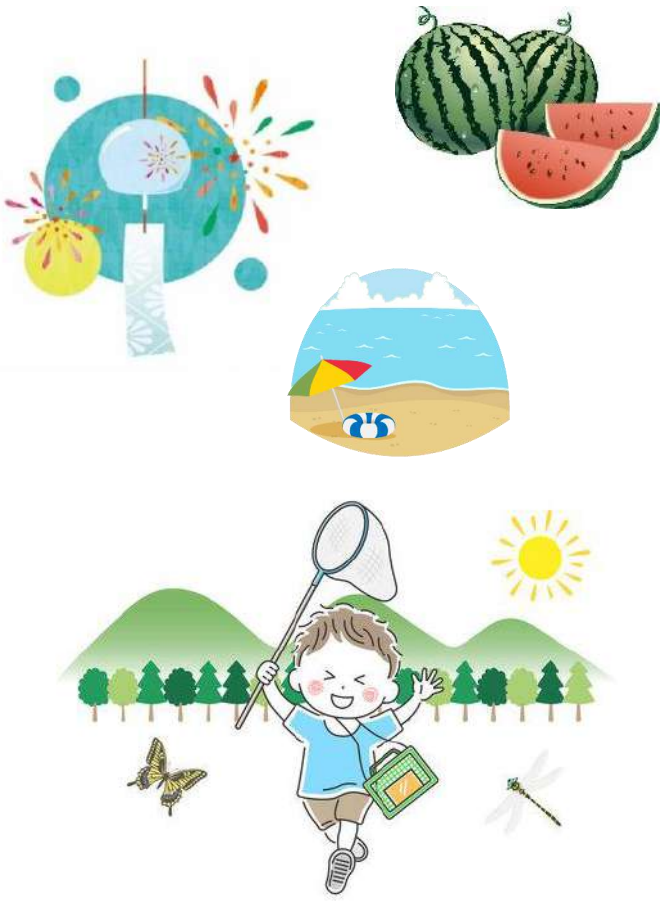
面白かった理由は二つあって一つ目は、弥が怒った所です。一つ目の願いが丸山さんという家族の家の地下水路が大きな石でせき止められていて、水が来なくて長者桜という庭の木が枯れてきて丸山さん家の娘がたたりにあっているらしく石を転がしてほしいというお願いをオキ丸と弥が夜にばれないように家の庭に入り、弥が石を転がし終わったとき丸山さん家で飼っている犬が吠えだし、娘が起きてしまい庭から出る前にバレてしまいました。その後庭から出てオキ丸にめっちゃ怒っていた場面を見て私は、弥ってこんなに怒るんだというびっくりした気持ちとオキ丸が焦っていて面白いという気持ちになりました。

二つ目はキツネ騒動の犯人を捕まえたところです。町では夜にお金をだまし取られることが多くなり、キツネのせいかもというを聞いた弥は毎晩オキ丸とその犯人を探すのですが犯人の捕まえ方がすごくて驚きました。オキ丸が女性に化けて、弥と落とし物をしたといい犯人と落し物を探し、お礼にと言って本当はない料亭と和室に犯人を泊まらせて捕まえたという驚くべき捕まえ方で私は読んでいるのが楽しかったです。

この本を読んでみて、私は毎年同じような夏休みを繰り返すのもいいけど、この本のような楽しくて不思議な夏休みもいいなぁと思いました。

＊講　評＊

重要な人物や印象的なエピソードを取り上げつつ、心に残った理由をしっかり書けていました。物語で描かれた不思議な夏休みを楽しそうだと感じられるほど、本の世界に入り込めていたのではないかと思います。



＊評価基準と講評について＊

○昨年と同じく、あらすじと読後の感想が書かれていることを基本とし、選書理由・自身の経験や境遇との比較・本から得た何かしらの気付きといった部分を深めている作品を選びました。理由としては、この部分こそ、その書き手にしか書けないものであると考えるためです。自分の言葉で書く、自分の考えを表明するといった自己表現ができると、自分の価値基準のようなものを形作っていきやすいのではないかと思います。

○奨励賞としている作品については、前の選定理由を踏まえつつ、少し物足りないと感じるもの、あともう少しというものを選んでいます。それとは別に、「視点の面白さ」という部分を評価し、読書感想文としては未熟なものの、その切り口を大切にしてほしいと感じたものも選んでいます。

中学生の部

☆　優秀作

なぜ考えは人によって違うのか

鬼脇中学校　三年　佐々木（ささき）　日馬（はるま）

この本は、ソ連とドイツの戦争によって家族と故郷を失ったロシア人の主人公が、ドイツに復讐をするために狙撃兵となり戦争に参加する、という物語です。主人公は戦争の中で出会うあらゆる立場の人をきっかけに、考え方が少しずつ変わっていきます。

自分がこの本を読んで印象に残った場面は、二つあります。一つ目は、主人公の戦争に対する考えが変わった場面です。主人公は、初めはただ復讐のために戦っていました。しかし、自分と敵、どちらが死んでもおかしくない状況で、主人公は敵を撃ち抜きました。生き残ったことで高揚や興奮を覚え、戦いを楽しむようになりました。自分は主人公の変わりように驚いたとともに、なぜ変わってしまったのだろう、と思いました。その大きな理由として、環境が挙げられると思います。最初の主人公がまだ戦争に参加していないとき、もし人を撃ってしまうと間違いなく非難され、恨まれてしまうと思います。しかし、戦争で敵を撃った主人公は、味方から褒められました。それがきっかけで、敵を撃つことはいいことであり楽しいこと、という考えになったのではないかと思いました。

二つ目は、幼馴染と再会する場面です。主人公は失われた故郷の幼馴染と再会し、少し会話をしました。そして、「どれほど普遍的と見える倫理も、結局は絶対者から与えられたものではなく、そのときにある種の社会を形成する人間が合意によりつくられたものだよ。」と幼馴染が言いました。自分はこれが正しいのではないかと思いました。なぜなら、戦争をしている軍隊を一つの社会とすると、社会を形成する人間、すなわち兵士達の合意により人殺しが当たり前に正当化される、ということになるからです。現に、主人公が戦争をしていなかった頃、人殺しは普遍的な倫理ではありませんでしたが、軍隊という社会に所属し、敵を撃ち抜いた数を自慢するようになりました。このことから自分はどんな人と関わるかというのも、考え方を変える原因の一つだと思いました。

自分はこの本を読む前は、なぜ価値観や考え方は違うのか、またなぜ変わっていくのか疑問に思っていました。ですが、この本を読んで自分は、価値観は本人の環境や関わる人によって大きく変わるものだと思いました。なので、他人にどう接するか慎重に考えなければ、いい意味でも悪い意味でも他人の人生を大きく変える可能性があります。現在は、ＳＮＳなどの誹謗中傷が多く行われています。それがきっかけで亡くなってしまった人も少な

くありません。自分は、これから少しでも他人のことを知り、なにかあっても正しい言葉をかけられる人間になりたいです。

＊講　評＊

こちらの感想文を読んだとき、「そういう見方か。なるほど、面白い」と走り書きでメモしていました。戦争を題材としている本だと戦争の良し悪しや平和のありがたさといった部分をまとめることが多い中、「人の考え方や価値観の違い・変化」という部分に着目しているのは非常に面白い視点でした。環境と関わる人によって考え方や価値観は変わると考察した上で、それを自分の身の回りのことにまで落とし込めているのも素晴らしいと思いました。

私も『同志少女よ、敵を撃て』を読みましたが、この視点で改めて読んでみたくなりました。主人公の価値観の変化をたどるとまた違う読み方ができそうです。

☆　優秀作

自分の過去と向き合う

鬼脇中学校　三年　井田（いだ）　心優（みゆ）

私は、大切な人や生き物を亡くしたことが何度もあります。一番印象に残っている別れは、私が保育所児の時です。先生に突然「お母さんが今から迎えに来るよ。」と言われ、車で帰っている途中に母から叔父が亡くなったことを知らされました。まだ幼く、死というものがどのようなものかも理解できていなかった私でも、叔父にもう会えないと実感した時には、涙が枯れるほど泣いた記憶があります。この記憶を思い出したのが『午前０時の忘れもの』を読んだ時でした。

この本は、バスの転落事故で湖の底に沈んで亡くなってしまった死者たちが、愛する人達に別れを告げるために、午前０時に戻ってきたという内容です。深夜のバスターミナルでの死者と生者の不思議な出会い。生きることの切なさ、命の輝き、そして人を愛することの素晴らしさが描かれた感動的な作品です。

物語の主人公は、過去の出来事を忘れてしまっていますが、ある夜、彼は真夜中の街で不思議な出来事に巻き込まれ、今まで忘れていた大切な思い出と遭遇します。彼がその夜に出会った謎の人物たちや出来事を通じて、忘れていた大切なことを思い出す旅に出ることになります。このプロセスは、彼にとって辛くもあり癒しでもあるたくさんの感情が読み取れる旅になっています。読者も主人公の過去の思い出を辿りながら、自分自身の奥にある「忘れもの」を振り返る機会になると思います。

この小説の特徴は、時間と記憶の関係が上手く描かれているところです。物語の中で過去と現在が交錯し、夢と現実の境界が曖昧になる描写があります。この不思議な感覚を読者に感じさせることで物語の深い部分へと引き込ませていくという作者の意図が捉えられ、とても印象に残っています。この小説を読み進めるうちに、自分自身も過去の出来事を思い出し振り返ることが何度かありました。また、物語に出てくる登場人物も魅力の一つだと思います。彼らは何かしらの「忘れもの」を抱えており、その過去や失ったものが彼らの現在の行動や考えに影響を与えています。主人公が出会った謎の人物たちは、彼が過去の出来事と向き合う手助けをしました。物語の中での重要な役割を果たした彼らは特に印象に残っています。主人公は、彼らとの関わりを通じて自分の中に隠れていた感情や真実に気づくことができたので彼にとっても恩人になったと思います。

私たちは、日常生活でさまざまなものを忘れていきます。時には意図的に、時には無意識のうちに。忘れるということは、頭の中の整理になるので生きていくうえで必要なことだとは思いますが、忘れたものの中に、本当に大切な記憶があるかもしれません。今自分も大切なことを忘れていると考えると少し悲しいし、もったいないなと感じます。この『午前０時の忘れもの』は、そうした「忘れてしまった大切なもの」を思い出し、もう一度向き合う気持ちを与えてくれる素敵な作品だと思いました。この小説を読み終え

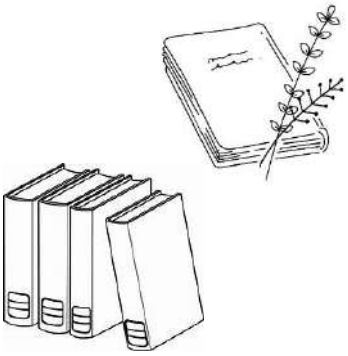
たあと、私は過去にあった嬉しかったり楽しかったりした出来事、苦しかったり辛かったりして思い出したくない出来事が自然に頭の中に浮かんできて振り返りました。きっとこの小説を読んでいなければ思い出していなかったこともあります。この物語を通じて、過去に埋もれた大切な記憶や感情と向き合うことの大切さを実感し、忘れたくないこと、忘れてはいけないことを自分で判断しこれからも大切にしていきたいと強く感じました。

『午前０時の忘れもの』はただの物語ではなく、私たちが生活している中でどれだけ過去の大事な記憶や感情を大切にできているか振り返らせてくれる一冊です。読み終わりには少し切なさが残りますが、それ以上に感動が広がります。この作品で出会えたことに感謝しつつ、過去の大切な思い出をこれからの人生においても大切にしていきたいと思いました。

＊講　評＊

冒頭から惹き込まれました。自分の経験と本の内容を常に寄り添わせて、ひとつひとつ確かめるように読んでいたのではないかと感じられる感想文でした。大切な人を亡くした経験という主人公との共通点から、本の世界に入り込んで辛さと癒しのプロセスを追体験したのではないかと思います。ビブリオセラピー（読書療法）というものがあるのですが、こちらの感想文を読んでいて、まさにその良い例だと思いました。

一方で、物語の構造や登場人物について考察し、小説自体の魅力についても言及しています。本を通して感情を動かされる体験だけでなく、客観的な視点でも楽しめていて充実した内容でした。



★佳作

『ぼくらの七日間戦争』を読んで

鬼脇中学校　一年　飯田（いいだ）　乃唯（のい）

私がこの本を選んだ理由は、母に勧められたからです。母も中学生の時に、この本を読んで、とても面白かったと教えてもらい興味を持ちました。

舞台は東京の下町です。主人公の英治が、友人の相原と、ある計画を立てるところから始まります。夏休みが始まって、近くの廃工場に中学生だけで立てこもり、「解放区」を作ろうというものです。「解放区」とは、大人や社会から離れた自由な場所のことです。ガリ勉、絵の天才、喧嘩の達人など個性豊かなメンバーが立てこもり、親に直接悪口を言ったり、先生に頭からペンキをかけたりと、たくさんのいたずらを仕掛けます。そんな登場人物達の「解放区」が破られるまでの七日間の戦いを描いたストーリーです。

この本は、一九八五年に宗田理さんによって書かれています。今から約四十年前に書かれているため、現代とは少し問題になることが違うのかなと思っていました。しかし、私と同じ中学一年の子供たちが、親からのプレッシャーや、政治的な悪事、いじめなど、問題となりうるものは時代が変わっても変わらないのかと思いました。ただ、今の私達は、自分たちで考え行動することができるのかを考えた時、答えは「できない」と思いました。彼らは、自分で考え大人たちと戦うという、とても勇気のある行動をしたところに、私はすごいなと感じました。仲間と協力する大切さ、友達のために戦う勇気、そして支えてくれるのは周囲の温かさだと、この本を読んでとても考えさせられました。

自分がやりたいことを楽しむ、言いたいことは言える。しかしワガママとは違う。そんな大人と子どもの間にいる中学生のはがゆさが、私にも思い当たるところがあります。この本のテーマの一つとして取り上げられている、「先

生との関係」です。先生の好き嫌いや、悪口を言うなど、ほとんどの中学生があると思います。完ぺきな人などいないので、好き嫌いがあるのは当たり前です。しかし、悪口を言っているだけでは、何の解決にもなりません。登場人物たちのように行動を起こし、自分の思いを伝え、話し合ってみることも必要だと思いました。

この本を読んでみて、母がなぜ、私に勧めてくれたのか少しわかった気がします。大切な仲間、勇気のある行動力、何より自分が感じたこと、考えたことを伝えられるような人間になりたいと思いました。

＊講　評＊

全体として簡潔にまとまっています。作品が書かれた当時の背景と今の社会を比較しつつ、問題になっていることは今も昔も変わらないということに気付いています。

そして、作品の中から「自分の思いを伝える」、「自分の考えをもとに行動してみる」という大切だけれどとても難しいことを実践していきたいという思いが感じられました。

P8 答え

上⇒まつり

下⇒しゃもじ

★佳作

「あの日々」

鴛泊中学校　二年　川村　栞（かわむら　しおり）

通信教材の読書感想文特集でこの本と出会った。『私たちの世代は』というタイトルと、「それでも、あの日々が連れてきてくれたもの、与えてくれたものが確かにあった」というあらすじの一文に惹かれ、そして、「あの日々」とはなんなのか、タイトルにある「世代」はいつを指しているのか気になりこの本を読むことにした。

本を開いてみれば、自分たちにも馴染のある光景が広がっていた。この本の主人公となるのは二人の女子小学生。三年生に上がる年、未曾有の感染症が流行し、不自由を余儀なくされた二人の少女の日々と、彼女らの少し未来を描いた物語である。外出自粛や分散登校など、かつて私たちも新型コロナウイルスが流行したときに経験した、感染症流行下のリアルな描写に、思わず共感する場面が多かった。ここでタイトルにある「世代」は、現実世界でいうコロナ禍に学生時代を過ごした人たちだと納得する。

二人の少女の感染症流行下の暮らしと、少し未来の就活時の話が交互に描かれる。そんな物語が進むにつれ、私が魅力を感じたのは二人の主人公の内の一人、小春という少女だ。小中一貫校に通っていたが、とあることがきっかけで不登校になってしまう。

彼女は学校で一斉登校が再開される際、親に最初の二週間は学校に行ってはだめだと言われたのだ。

小春は分散登校時、違う登校グループで自分と同じ席に座る”手紙ちゃん“と文通をしていた。違う曜日に登校する二人は自分の席にメッセージを書いたノートの切れ端を忍ばせ、早く元の学校生活を取り戻したいと嘆いていた。そんな手紙ちゃんと

「全員登校がＯＫになった最初の日の朝、校門のチューリップ花壇前で待ち合わせしよう！」
と約束していた小春は何が何でも学校に行きたかった。糖尿病の父親が感染した際のリスクを諭されても、父親が死んだらどうするのかと言われても、行きたいと泣き叫んだ。登校日になっても、親は小春に登校させる気は全く無かった。初日に登校できず、手紙ちゃんとの約束を守ることができなかった小春にとって、学校はもう何の魅力もない場所になり、何かが抜け落ちたようにやる気を失った小春は不登校になっていた。

この場面を読んだとき、私は言葉が出なくなった。私は小学生の頃、新型コロナウイルスに罹ったことがある。そのときは検査前に誰かに移していないか、他に罹ってしまった同級生や他学年は大丈夫か、家族には移していないか、様々な心配をした経験があるので、小春の母がとても心配するのもわかる。それでもずっと楽しみにしていた一斉登校を前に、自分の行動がきっかけで、家族が死ぬかもしれないなんて重い事実に直面した小春のことを思うととても可哀想で思わず同情してしまった。

小春が不登校になるきっかけとなったこの場面以外にも、感染症によって大きく変わった暮らしを描く話を読んで、私たちの暮らしに大きな影響を及ぼし、多くのものを変えてしまった新型コロナウイルスについて、私はコロナ禍が終わり、もとの暮らしに戻りつつある今だからこそ改めて恐ろしいと思った。

『私たちの世代は』では「新型コロナウイルス」や「コロナウイルス」などの表記は使わず、「感染症」で表記を統一している。これは私の自論になってしまうが、他の感染症や災害、戦争などにより、私たちの暮らしが大きく変わる可能性は常にあり、「感染症」とぼかすことで、コロナが特別だったわけじゃないと伝えたいのではないか。

新型コロナウイルスによってもたらされたものの中には、もちろん良いものだってある。それでも、私たちの暮らしを大きく変え、当たり前だったことができなくなってしまった「あの日々」を私は忘れず、後世に伝えながら生きていきたい。

＊講　評＊

自分や周りの人たちが経験したコロナ禍のことと本に描かれた未曾有の感染症が流行した世界での出来事を照らし合わせて読めています。それまで当たり前だったものが変化してしまうのは（たとえそれが良い変化でも）不安に感じる面も多かったですよね。

また、本の中で新型コロナウイルスではなく「感染症」という表現をしていることについての考察も興味深かったです。

★佳作

「生きる」ということ

鴛泊中学校　三年　黒川（くろかわ）　結凪（ゆうな）

「娘に会うまでは死ねない、妻との約束を守るために。」

そう言い続けた男は、なぜ自ら「特攻」を選び命を落としたのだろうか。

この物語は、主人公とその姉が特攻隊で亡くなった祖父の生涯について知るために、祖父のかつての戦友を訪ね、調べていく話である。

祖父の人物像を聞くと、戦友たちは口を揃えて、海軍航空隊一の臆病者で死ぬことを何よりも怖れていたと語った。当時の人は、そのような気持ちを持っていても、表には出さず、戦っていた。だからこそ、素晴らしい技術を持っているのに戦おうとしない祖父は同じ航空隊員から一目置かれていた。だが、祖父である宮部久蔵には愛する妻と娘がいて、妻や娘の未来のために必死で生きようとしていたのだ。辛いときには、妻と娘の写真を見て元気をだしていた。きっと宮部久蔵だけでなく他の兵士にも家族がいて、友達がいて、恋人がいて。死にたいと思う人はいなかったと思う。

私が生まれた時代や国は運が良く、戦争もないし、食べ物も食べたいときに、食べたい分だけ食べることができる。家族と暮らし、学校に通い、友達と他愛のない話で笑い合える。普段は当たり前に思っていることも、この本を読めば今の自分がどれだけ幸せなのか実感できる。そして、他の兵士からは否定されていた宮部久蔵の行動に納得できる。

宮部久蔵は仲間の兵士に戦争が終わったら何がしたいのかを聞いたことがあった。「家族と一緒に暮らしたい」「誰かの役に立つ仕事がしたい」と今ではやろうと思えばできることばかりの答えだった。私は、今の環境に恵まれているから、やりたいことができるし、それを応援してくれる家族がいる。将来の選択肢もたくさんある。そんな、自分の当たり前にもっと目を向けていかなければいけないと思った。当たり前だと思っている幸せに気づかなければいけないと思った。そして戦時中、辛いこと、苦しいことがあったとしても生きることを諦めず、家族のために「生きる努力」をしてきた宮部久蔵を見習いたいと思った。

でも、何故そこまで強く「生きたい」と思っていた男が最後に自ら「特攻」を選び命を落としたのだろうか。

それは、宮部久蔵の人間性にあると思う。彼は誰にでも優しく、自分が「生きたい」と思うように、仲間の兵士にも「生きたい」と思う気持ちがあることを知っていた。そして、宮部久蔵は海軍航空隊一の飛行機操縦士と言われるほど腕が良く、今回の戦いに勝ち目がないことも知っていた。無駄な命を出さずにすむなら、日本の未来のために自分が「特攻」するしかないと感じたのだと思う。

私はこの本を読んで、一人ひとりの命の大切さを学んだ。自分が「生きたい」と思うように友達や家族も「生きたい」と思う。その一人ひとりに家族や友達、恋人がいる。時代が進んでいくと同時に、戦争を経験した人は減っていき、戦争が自分たちにとって遠いことのように感じるかもしれない。でも、自分や周りの人の命を大切にし、どんな事があっても「生きる努力」を惜しまない人でありたい。そして、誰かのために行動できる人になっていきたい。

＊講　評＊

「生きたい」と言い続けていた男がなぜ「特攻」を選んだのか。という疑問について提示し、登場人物の性格や生き方を通して、自分なりの考えと答えをまとめられているのが良いと思いました。

戦争があった時代、そして今生きている時代の背景や環境を比較しつつ、「命を大切にする」といった今も変わらない本質をとらえて、改めて見つめ直そうとしているように感じられる感想文でした。

★佳作

「現代の私と向き合って」

鴛泊中学校　三年　長森（ながもり）　未羽（みう）

終戦をしてから約八十年経った日本。現代の日本は戦争がないのが当たり前。これが当たり前な現代人の私達から戦争は程遠いもの。ウクライナとロシア、イスラエルでの紛争など、度々耳にするが、他人事になってしまう状況の中で、紹介動画を見たことをきっかけで本書『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら』に出会い、かつて日本で起きていた戦争と向き合うこととなった。

親や学校、全てに対して苛つく毎日を送る主人公で中二の百合。ある日、母親と喧嘩をして家を飛び出し、目が覚めるとそこは戦時中の日本。そこで通りかかった特攻隊員の彰に偶然助けられ、彼と過ごす日々。戦争の苦しさと二人の恋が混ざり合う、悲しく切ない日々が描かれている。

私はこの本のあらすじを見た時、目が覚めたら異世界転生のような話だと思って、あまり期待せずに本を開いてみると、そこには生々しい当時の戦時中の日本が描写されていて、とても衝撃的だった。私は百合のように親などに対して苛立ってしまうことが多く、百合と自分が重なり、主人公になった気分でその世界に入り込んでいった。

百合は、現代の中学生を模したように描かれている。戦時中の日本で、百合を匿ってくれたのが鶴屋食堂のツルさん。ツルさんの営む店の近くには陸軍の飛行場があり、よく特攻隊員も利用している。そこで百合は住み込みで働くことになり鶴屋食堂で日々を送っていた。その日々の中の衣食住を見ると、服は「モンペ」、味の薄い味噌汁・さつまいも・茶色っぽい米・得体の知れぬ代用醤油などといった質素で不衛生なご飯、銭湯はあるが燃料が手に入らず閉まっている日が多く、風呂の代わりに庭での水浴び、米の入手が困難などの他にも、現代のように普通に学校に行けて当たり前ではなく、学徒動員などで、働き盛りの男子は兵士に招集され、戦場に出征してしまうので、働き手不足になり、残された生徒や学生は労働力として軍需工場で働きに行っていたのだ。現代の日本では考えられない生活を当時の人たちは当たり前のように過ごしていて、戦争だけでなく、その戦時中の生活も大変だということに驚いた。

そして物語の中のキーとなる「特攻」。特攻とは行きだけの燃料を積み、戦闘機に乗って敵の艦船に体当たりし、パイロットが自分の命を犠牲にするということ。物語中で、百合が特攻に対して「誰かを救うために、自分の命を失うのはおかしい」「突撃して、艦船をいくら沈めたって、そんなのアメリカにとってたいした痛手になってない……。」などと言っているのを聞き、日本が負けるのを分かっている現代の私達はそう思うのが多いと思った。けど百合が言った言葉に対して、彰が言った、「たとえ勝算が皆無だとしても、それでも最後の最後の一瞬まで諦めない。諦めたその瞬間に日本は確実に終わってしまうから。だから俺たちは、万にひとつの可能性に賭けて出撃するんだ。特攻は日本に残された最後の砦なんだ。」この言葉を受けて特攻に対しての考え方が変わった。

今までは百合のような考え方を持っていた。特攻しても意味ない、なぜ命をそんなに犠牲にするのだろうとでも違った。特攻は日本の最後のあがきであった。その特攻さえ誰もしなくなったら日本が終わってしまう状況にあったのだ。特攻があり、その特攻で命を犠牲にしてくれたからこそ今の日本があると知ることができた。現代を生きている私に対して、戦争の悲惨さやその意味をしる機会をくれたのはこの本のおかげで、戦争は身近な存在であることに気づかせてくれた。そして百合と彰のように、戦争のせいで家族や恋人と離れざるをえなくなるようなことが、現代でも世界中で起きている。戦争の裏には悲惨なことが沢山詰まっている。この現状が終わるのは難しいことをこの小説を通して知ることができた。では、その状況に対して、他国の私達ができることについて考え、それを行うことが大事だ。例えば募

金や物資の供給、次世代に戦争の悲惨さを伝えていくことなど。そのようなことを考える機会をくれたこの本との出会いはとてもいい出会いになった。

結局彰達は遥か遠い空に飛び立ってしまった。彰達のような特攻隊員は現実にも居た。だから、日本のために戦争に挑んでくれた人達への感謝を忘れずに、歩んでいきたい。

＊講　評＊

主人公と自分自身の共通点を見つけ、重ね合わせることで主人公の体験を追体験していたのではないでしょうか。

物語の中で描かれる「特攻」について、本を読む前に抱いていたイメージと読んだ後の考えで変化があったことも書かれています。本を読むとキーワードについての解像度が高くなることがありますが、まさにそのような読書体験ができたのではと思いました。

★佳作

人生の中で大切な事

鴛泊中学校　三年　長森（ながもり）　ルナ

『プラダを着た悪魔』は人生において何を優先し、選択していくべきかを教えてくれた作品です。

ジャーナリストになるために田舎からニューヨークにやってきた主人公アンディ。オシャレに興味のない彼女だが、なぜかファッション業界の大手である RUNWAY 編集長のミランダのアシスタントをすることになりました。ミランダは有能で影響力も絶大ですが、人使いが荒く、無理な要求をするまるで悪魔のような女性でした。

アンディは仕事の中で様々な困難にぶつかります。ミランダの厳しさや無理難題な要求に困ったり、上司や同僚たちとの関係も複雑になっていきます。また、アンディの恋人との関係や友人たちとの距離も徐々に遠くなり、ファッション業界での成功と私生活のバランスの難しさが書かれています。

私は映画の中で好きな名言があります。それは、悪魔編集長ミランダに無理難題な仕事を命じられるもこなすことができず怒られ、納得のいかないアンディがアートディレクターのナイジェルに泣きながら愚痴りました。その時ナイジェルがアンディにズバっと言った一言が。

「君の仕事を引き受ける代わりの子なんて五分で見つかる。本当にその仕事をやりたい子がね。」

この言葉は心に響く人がとても多いのではないかと思います。ナイジェルのこの言葉からアンディは段々とこの業界をよく知ることになります。

アンディは元々ジャーナリスト志望だったのでファッションのことには無関心で、服装も今まで通りで問題ない、オシャレな職場で働いていても自分自身は変わる必要はないと思っていました。ファッションについて興味を持とう

としないアンディにナイジェルは度々助言を与えていましたが、なかなか変わろうとしていませんでした。そしてある日、ナイジェルはアンディの愚痴を聞きはっきりと、「じゃあこの仕事辞めればいい」と先ほどの名言と共に言い放ちます。それに対しアンディは仕事を辞めたいわけじゃない、自分は一生懸命仕事をしていることを分かってほしいだけだと言いました。するとナイジェルは「君は努力していない。愚痴を言っているだけだ。」と言いました。ミランダはとてつもないパワハラ上司なので、アンディの気持ちも共感できます。ですがナイジェルの言葉はごもっともなんです。嫌なら辞めればいいし、辞めたくないのであればまず自分が変わるべきということです。興味のない業界だったとしても、自分の本当にやりたい仕事に繋げるためにめげずに辞めないで頑張っていたつもりのアンディでしたが、ナイジェルから言われた一言ではっと目を覚ましました。自分はファッションに全く興味がなくただ嫌々仕事をしていたけれど、この業界にはファッションに熱を持って働いている人がいること、それどころかミランダに認められたいと嘆いていたことに気づいたのです。

そこからアンディはファッションに対する関心を強く持つようになり、ナイジェルからサポートを受けながらも徐々にアンディが成長していくところは見ていて鳥肌が立つほどわくわくしたし、この作品は本当にすごいなと改めて気づかされました。

この小説は映画もありどちらとも見ているのですが、とてもオシャレな作品だと見て率直に思いました。綺麗な格好で歩く女性達、最初は冴えない格好をしていた主人公が徐々にオシャレに目覚め変わっていく姿、映画では冒頭三分でその作品のオシャレさが分かるのでそこだけでも見てほしいです。

アンディは元はミランダと同じで仕事優先でプライベートを捨てていたけど、本当になりたい道を目指して進んで幸せなアンディと絶対的な権力を持ちながらも幸せじゃないミランダが対になっているところが物語っているなと思いました。

この作品で本当になりたい自分は何なのか？他人を蹴落とし、大切な人を失ってまでもキャリアを築くのがやりたかったことなのか？というのを考えさせられました。この作品を通して私は超一流になるためにはある程度の犠牲が必要だったり、先を見超えて仕事をすることは重要なことだと気づけました。それと同時に仕事よりも大切なことは人間関係だと気づきました。大切な人と過ごせる期間はあっという間に過ぎてしまうものです。なので後悔しないようにその人との時間や思い出、絆を作ることが人生においてもなによりも大切で幸せなことだと学ぶことが出来ました。

自分の中で大切なことを見失わない強さとは何なのかというのを仕事を題材にしながら表している作品であり、頑張る若手の成長物語です。

＊講　評＊

物語の中で印象的だった部分について、自分自身の感想も織り交ぜつつ丁寧に説明ができています。そして、そこからこの物語が伝えたかったことをしっかり考えることができています。

本を通して、人生において大切なことについても学べたとあります。この読書体験を活かして、素敵な人生を歩んでいってほしいです。

★佳作

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』を読んで

鴛泊中学校　三年　福士（ふくし）　恭平（きょうへい）

読書感想文の本をこれにした理由は国語の教科を担当していた先生がおすすめしたからである。僕はこの本を読んで何かが大きく変わった訳では無いが、読む前の自分より読み終えた自分のほうが少しだけ落ち着いたと思う。

この本の主人公と自分は違う。例えば環境。この物語の主人公は市のトップの小学校に入学したが僕は地元の小学校。主人公の通う中学校にはいろんな人種の人々が通っているが、僕の通っている中学校は少人数で日本人しかいない。

この本の主人公は少し物静かだが、自分と似ているところが少しあった。それは小学校のときに児童会長をしていたり水泳が得意だったからだ。そして一番と言ってもいいほどの大きな類似点が僕と主人公にはある。主人公は「ブルー」という感情を「怒り」と思っている。この本に書かれている「ブルー」の説明は「悲しみ」「気持ちが塞ぎ込んでいる」となっている。僕も「ブルー」の感情は悲しみとは思わない。僕は「ブルー」の感情を「明るい」「幸せ」だと思っている。青色と言われて何を想像するだろうか。僕は雲一つない快晴の天気を思い浮かべる。だから本に書かれている模範解答とは違う考えをしている僕と主人公は似ていると思った。

この本を読んでいて考えてしまった本の中での出来事がある。それは、正義は暴走しやがるから出てきたものだ。家が貧しく万引きをしてしまったティムと、それを発見して咎め始めた同級生たちが取っ組み合いをしている場面。この本には「誰かの靴を履いてみること」というストーリーがあり、その誰かの靴を履いてみることとは相手の立場に立って考えてみるということ。主人公はこの場面のとき母親を呼びティムの兄と母親が出てきてその場は収まったが、もし僕がその取っ組み合いの場面にいたら、主人公と僕が入れ替わっていたらと考えると僕は見て見ぬふりをしていただろう。人の喧嘩に参加してしまえば変に恨まれるかもしれない。そして僕がティムや同級生だったら第三者は出てきてほしくないからでもある。しかし暴力をするのは良くないと思う。だが今回の喧嘩に関しては両者どちらにも非がありどっちが正しいなどは言えない。果たしてこの行動が正解なのか不正解なのかわからないが、自分なりに答えを出すならかかわらないがちょうどいいと思った。このような場面は自分の人生の中でも起こった。見て見ぬふりをしないで止めにいけと思いつつ、その場を通り過ぎてしまった自分が情けないとも思うがあの行動は正解だと今振り返っても思う。

だから主人公は何もしようとしていない、何もできなかった僕と違ってすごい行動に出たと尊敬している。

この本の主人公は自分を「僕はイエローでホワイトでちょっとブルー」と言っているが最後は「僕はイエローでホワイトでちょっとグリーン」と言っている。僕も自分を色で表してみるなら「イエローでオレンジでちょっとグレー」だと思う。イエローは幸せ、オレンジは元気、そしてグレーは迷い。今後、この自分の色は変わっていくと思うがその変化を大切にしていきたいと思った。

＊講　評＊

主人公との異なる点、似ている点をそれぞれ考えて書いているのが面白いと思いました。自分とは異なる環境にいる主人公に対して、似ている点を見つけることで親近感が湧いて本に入り込みやすくなったのではないかと思います。

そして、物語の中で重要といえる「自分を色で表現する」というのを「イエローでオレンジでちょっとグレー」と自分自身でも表現してみているのが良かったです。

★ 奨励賞

『桃太郎』を読んで

鴛泊中学校　一年　近江（おうみ）　美和翔（みなと）

私は今国語で桃太郎を題材に勉強しています。それをきに改めて読み返してみると気になるところや疑問に思うところがありました。まず気になったのはなぜ子供が入っていたのが桃だったのか他の果物のほうが持ちやすかったりしたのではと思いました。

次にその重い桃をどうやって持っていったのか？まぁ細かいことを言い始めるときりが無い感じでどんどん出てきそうです。おおまかに桃だった理由としては、桃が霊的な果物とされ不老長寿をもたらす果物として他の昔話にも登場したり日本神話にも登場しているからだろう。

おともが犬、さる、きじだったのは十二支を並んで配置させたとき、鬼門に当たる東北の反対にあるのがちょうど戌、申、酉なので選ばれたそうです。

桃太郎の話は江戸時代頃にはあったそうですが昔は流れてきた桃を食べたおじいさんとおばあさんが若返り生まれた子供が桃太郎という筋書きが多かったようです。しかし明治時代につくられた日本昔噺以降桃から誕生した桃太郎という説が主流となったようです。

このように時代が変わるにつれて話の内容も変わっていて、私が子供の頃に読んでいたものと将来銃年後、二十年後に読む桃太郎とでは色々と変わっているのかもしれません。ですが、桃太郎を通じて子どもたちに伝えたいことは変わらないと思います。一人では大変なことでも仲間をつくり一緒に立ち向かうことで目的を達成できることや、仲間の大切さを学ぶはじめの物語としてこの先もずっとあってほしいと思います。

同級生や先輩方も保育所から今まで同じ環境で過ごして来ましたが、運動会などでは学年関係なく話し合いをし、協力をして本番を成功させてきました。その中で意見が合わずにぶつかったり、お互いを考え妥協するところは妥協するなどたくさんの経験をしてきました。仲のいい友達同士でも小さな喧嘩や気持ちの行き違いなどでお互い嫌な思いをすることもありますが、最後にはちゃんと仲直りできています。

これから高校やその先に進学したり、就職をしていくと新しい出会いがあり、人間関係を築いて行くことになるなかで、桃太郎のようにきびだんごで仲間になってくれるわけもないだろうから、どう仲間を増やしていくのか、いけるのか不安があります。でも、ありのままの自分を受け入れてくれる仲間を大事に成長していきたいです。

＊講　評＊

よく知られた物語とはいえ、あらすじはしっかりと書いた方が良いですし、表現についても話し言葉ではなく書き言葉で書いてほしい部分もありました。しかし、物語に登場するものの由来や象徴を考察するという読書感想文はなかなか見たことがなく、面白い切り口だと思いました。その視点を大切にしてほしいと思います。

『読書感想文を書いてみた』

第三十八回読書感想文コンクール審査アドバイザー

淡濱社　濱田実里

昨年に引き続き、読書感想文を読ませてもらいました。お疲れ様でした。前は「どうして読書感想文を書くのか」について書きましたが、今回は読書感想文を私も書いてみることにしました。書いたのはおそらく小学校か中学校以来なのでとても久々です。

本を読みながらメモをとったり印をつけたりできるように、大き目の付せんと細い付せんを用意。付せんをまとめて貼れるようにコピー用紙を一枚。あとはしおりとペンで準備完了です。

（本を選んだ理由）

橙と青の対照的な色遣いで少年と猫が対面しているイラストの表紙が目を惹き、手に取ったのは数年前。『本を守ろうとする猫の話』は、本好きとしては書名も気になるところです。ある仕事で装丁（本の装い）が特徴的な本を紹介することになり、それを機に積読していた今作を選びました。

（あらすじ）

今作は一介の高校生・夏木林太郎が不思議なトラネコに導かれ、迷宮に囚われた本を救う物語です。

（あらすじより長い物語全体の内容）

さまざまな思いがやがて忙しなさや心の余裕のなさで歪んでいき、あるいは思いが極まりすぎて、「好き」であったはずの「本」を大切に扱わなくなってしまった人間たちと林太郎は迷宮で対峙することになります。この不思議な体験を経ることで、林太郎は唐突な祖父の死を少しずつ受け入れ、自分自身への思い込みや人の思いに対する考え方が変わっていきます。すべての迷宮を無事に乗り越えた林太郎は、その心の成長を見せるようにある決断をします。

（対照的なものに注目）

この作品の表紙と本文中の表現について気になった部分があります。橙と青の対照的な色遣いをした表紙という部分については冒頭でふれましたが、本文中のさまざまなところで橙と青と思われる対照的な表現を見つけることができます。それははっきりとした色表現であることもあれば、人の性格や周りの様子であることもあります。

「青く澄み渡っていた冬の空は、おおから茜色に染まりつつある」

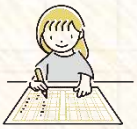
「陽気な笑い声」と「透き通った冷気」

「勇ましく進んでいく」と「びくびく行動する」

挙げた部分以外にもこのような表現が散りばめられています。印象的な表現を表紙の色遣いとして採用しているのも、おそらく本を作る人々が本の世界観を大切にした結果なのだろうと思いました。

この他に（心に残った言葉）（自分に思い当たること）（読んでみた感想）などの項目を設けて、それぞれ書いて、あとから順番を変えたり、つながりを整えたりしました。結構時間も手間もかかるし、あれやこれや悩んで大変でした。けれど、こうして読書感想文として残すと、自分自身がそのときに何を感じて、何を考えていたのかよくわかります。その時に気になっていたこと、困っていたことなんかも見えてくるかもしれません。

大変でしたが、本を通して得た自分の考えや思いを書き残すのは、自分を見つめ直す意味でも定期的にやったらいいなと思いました。大人も読書感想文を書いてみると良いかもしれませんね。



【第三十八回　読書感想文応募校と応募数】

■小学校一学年の部
鴛小　三点
利小　〇点

■小学校二学年の部
鴛小　一点
利小　一点

■小学校三学年の部
鴛小　三点
利小　四点

■小学校四学年の部
鴛小　〇点
利小　四点

■小学校五学年の部
鴛小　二点
利小　五点

■小学校六学年の部
鴛小　三点
利小　六点

■中学校の部
鴛中　三十二点
鬼中　十六点

小学校計　三十二点
中学校計　四十八点
合　計　八十点

（一次審査）応募作を部門ごとに分けて、名前や学校名などを消した状態でまずは各審査委員が全作品を審査し、小学校は学年毎に五編程度、中学校は全体で十編程度に絞りました。
（二次審査）一次審査の結果を参考にして、審査アドバイザーが各賞を選出しました。アドバイザーも同じ条件で審査しています。
（審　査　会）教育長にも参加していただき、各賞を決定しました。

【審査アドバイザー】
淡　濱　社・・・・・・濱田　実里　さん
【審　査　委　員】
利尻富士町教育委員会
山谷　文人　　熊谷　卓耶　　佐々木　諒介
【表紙イラスト】　絵本作家　そら　さん
【イラスト協力】　辰巳　富雄　さん
PORTO COFFEE　さん

●令和六年度　第三十八回読書感想文コンクールを終えて

読書感想文コンクールに、応募していただいた児童・生徒の皆さん、ご協力ありがとうございました。
加えて淡濱社の濱田さん、各学校をはじめ本事業に関わってくださったすべての皆様に心から感謝申し上げます。

今年も、応募作すべてを楽しく読ませてもらいました。しかし…審査は昨年より難しかったです。何が自分を迷走させたのか。いま改めて考えると、『五つの審査基準で何を優先するか』でかなり揺れたのだと思います。あぁ、審査って難しい。
生成AIの登場も印象的な出来事でした。先生方は審査業務からは退きましたが、感想文の書き方指導、提出作品の確認・誤字脱字などの助言指導などで関り続けてくれており、その過程で発見されたのです。子どもたちの苦労も窺え、思わず微笑んでしまいました。
正しい技術の活用方法とオリジナルを生み出す難しさについて、改めて考える機会となりました。（⇒文章作成二十四時間…自分乙）

利尻富士町教育委員会　鬼脇公民館業務係　主査　熊谷　卓耶

読書感想文コンクール作品集　第三十八号

令和六年十一月　発行

発行者　利尻富士町立鬼脇公民館

印刷所　株式会社国境